紹介にあたって

ここに紹介する〝コメコン国際産業政策論〟は，キシュネ・パヴェルチャーク・アグネシュ（Kissné Pavelcsák Ágnes）が表記のタイトルでブダペストのコシュート出版所から1981年にだした著作の一部を要約したものである。原文はもちろんハンガリー語で書かれたものだが，わたくしが利用したテキストはそのロシア語版である。要約にあたっては，全体の文意を損わないように慎重に配慮したつもりである。

筆者は1937年7月16日生れ，1963年に哲学・芸術大学を卒業し，1972年経済学博士の稱号を取得し，現在ブダペスト畜産大学でコメコン経済論を講義している。著書論文は多いが，とくに1978年に夫君ティーボル・キッシュ（Tibor Kiss）との共著になる〝コメコンにおける国際経済政策と計画化の協力〟は有名である。

本論はかなり論争的な性格をもっている。一つには，ハンガリー国内の論争相手を批判しつつ，二つにはソ連や東ドイツにおけるコメコン経済論に反駁している。彼女は，小国としてのハンガリーの立場を強く意識しつつ，先進資本主義諸国のインパクトのもとで，コメコン諸国間の矛盾の絶えざる発生とその解決こそコメコン発展の道だという方法論に従っている。その意味で彼女の立場はリアルであるといえよう。

彼女が本論で取上げたいくつかの論点は，ティーボル・キッシュの著書〝International division of lalour in open economy〟（日本語版〝開放経済と国際分業〟名島修三訳，合同出版）のなかで提起された問題点の展開を取り入れており，とくに興味深い。しかし，重点はオイル・ショックを受けたコメコン経済の当面する諸問題におかれている。

わが国におけるコメコン経済研究は，理論問題においても，またとりわ

け実証分析においても，経済学研究の領域でもっとも立ちおくれた分野に属する。ここに紹介するアグネシュの論文がコメコン経済研究の一つの手がかりとなりうれば幸いである。(名島修三)